

近年、子どもの遊び場に大きな変化がみられている。かつて遊び場の定番であったブランコ、シーソー等の遊動遊具での事故が多発したことにより、2002年に国土交通省から「都市公園における遊具の安全確保に関する指針」がだされて安全確保の動きが進められてきた。その一方で、整地された平坦地に大型の複合遊具を配する画一化された公園の遊び場が急速に広まるようになった。それらの多くは、赤、青、黄などの彩度の高い原色で彩られ、鉄とプラスチックで構成された、ユニット化された遊具である。筆者が全国の多くの公園を見てきた限りでは、大規模公園の特殊なものでもない限り、以前に比べて子どもたちの歓声は少なくなってきた。

かつて子どもは、至る所に遊びの場を見だし、遊び場は多様であった。とりわけ、自然の場に多くの遊びの要素を見だしており、それは学びの場でもあった。しかし、都市域では子どもたちが近づくことのできる自然のエリアは大きく減少し続けており、子どもたちが野山で遊ぶ姿を見かけることはほとんどなくなってきた。今日、都市の遊び場に求められるのは、人工的で画一的な遊具ではなく、自然と向きあうことのできる遊び場であると考えられ、筆者はこれを自然遊び場と名づけている。

子どもの遊び場については遊戯行動等に着眼した分析は多く見られているものの、自然遊び場については、事例が少ないため研究としての進展は見られていないのが実状である。一方では、森の幼稚園などの取り組みやオランダなどでは、自然環境を遊びの場とする独創的な自然遊びの事例も見られている。

本研究では、近年の都市公園に急増している複合遊具の問題点を探り、自然遊び場のあり方について検討し、そこでの遊びの手法やその素材、そしてそこから得られるものとしての自然遊び場を実現する手法や方策についての考察を行う。

はじめに複合遊具の問題点について述べる。第一は、多くの遊具に用いられている素材が安全性確保のために鉄とプラスチック製であることであり、これらの素材は熱伝導率が高く、夏季には高温化することであり、手にふれると熱いことから利用が手控えられるという動きも見られている。脱プラスチック社会を目指す動きからも子どもの遊び場にこれらの素材を用いることの再検討が必要であると考えられる。

第二は、感性の育成期にある子どもたちに彩度の高い原色を施した複合遊具の環境に委ねることについての疑問である。色彩感覚は幼少期から育成され、このような色彩環境に委ねることは、将来、生活の場の色彩環境に無知覚になる感覚を育成することにつながりかねない。

第三は、こうした複合遊具では類型化したパターンでの遊具を配することで、人工的で画一化する傾向が見られていることである。子どもたちは自らが関わることで、何らかの変化が生まれ、発見が得られることを望んでいると考えられる。

次に本研究で調査を行った複合遊具と自然遊び場の事例についての検討を述べる。

複合遊具の事例 1:

和歌山県北部の自治体に配されている複合遊具では、平坦地に複合遊具が配されている。自然と一体化するという考え方がないためか、樹木も少なく、夏季には高温化し、鉄とプラスチックの遊具の温度は、40℃代後半に達している。調査の際には、これを利用する子どもは少なく、隣接するふわふわドームという山状のトランポリン遊具に集中しての利用がみられた。

自然遊び場の事例 1(河南町中村こども園自然遊び場):

2020年3月に完成した子ども園の遊び場で、この年の主たる遊び場は、園庭の芝に70-90cmの起伏を配しただけのものであった。園児らは朝から歓声をあげて、この起伏を駆けまわり、奥の滑り台と築山を一体化させた起伏のある場集っている。

自然遊び場の事例 2(和歌山県紀の川市の遊びの丘):

2021年8月に完成した自然遊び場である。この遊び場は、河南町の起伏の園庭を発展させたような遊び場であり、90cmの小さな起伏と共に、3mから2.5mの大きな起伏があり、それぞれの起伏にロープやトランポリン、飛び跳ねるネットなどの遊具を配して、複合的につないで、ここを駆けまわることで、自然の中で遊ぶような環境としており、起伏の中腹には、ヤマブキやヒメジャガ等の植物を配されている。ここでは、高い砦があり、そこに登るには、いくつもの試練を経なければならぬ。この遊び場の特徴は、登る、跳ぶ、滑る、揺れるなどの遊びの多くの原理と共に、心に訴える遊びのあることである。二人以上でないと遊ぶことのできないゴンドラ、一人になりたい時の空想のテントなどがある。

自然遊び場の事例 3(森と畑の幼稚園いろは):

森の棚田跡を活用した認定外幼稚園であり、傾斜や起伏を活用した様々な自然遊びが行われている。印象的であったのは、自然ボルダリングと名づけて傾斜地を3歳児らが登ることである。園児らは、掴む箇所を見据えながら、真剣に登っており、見事に10m程の上まで登っている。

調査した自然遊び場では、複合遊具の前述した課題は克服されている。平坦地に遊具を配するのではなく、傾斜や起伏を多用して、それらを活用したり、そこに遊具を配することで、人工的で画一的な環境は解消されている。起伏や傾斜は環境に変化を生みだしており、そこに植物を配することで、開花、新緑、訪れた昆虫を観察するなどの発見を得ることにつながっている。

近年、幼児の調整力の欠如により転んだ際に前歯を痛める等の事故が見られている。起伏等の変化に満ちた環境や、揺れる板の上を歩くなどの行動を積み重ねることで、平衡感覚や調整力は育まれる。自然遊び場は単に運動をするだけではなく、自然の発見や人間関係に想いを巡らせることの力を養う場としても効果を発揮する。子ども園や公園での普及が望まれる。